ブック・レビュー

寺西俊一著

地球環境問題の政治経済学

「ブラジル会議は、人類が生き残れるかどうかのラストチャンスになるかも知れない」――本書の「終章」では、国連環境計画のトルバ事務局長のこの言葉が紹介されている。

まさに「環境破壊型の地球社会」から「環境保全型の地球社会」への転換が、待ったなしの課題となっている。にもかかわらず、その転換は、南北間、各国間の利害対立のカベ」によって阻まれている、と著者はいう。錯綜している地球環境破壊の原因を5つに分け、構造的解明を加え、解決の基本方向に提示していることは、本書の最大のメリットであると言えよう。

5つの類型と解決方向は、次の通りである。

1)越境型の広域環境汚染

従来からあった環境汚染が国境を越えて広がったもので、酸性雨被害はその典型である。汚染者負担原則による被害補償責任や汚染発生源での除外対策など、国内の公害対策において既に確立された原則を条約や協定などを通じて国際的原則に高めるとともに、「国益」を越えた「地域共同利益」の追求が課題とされる。

2)「公害輸出」による環境破壊

先進諸国から途上国への①危険物・有害物の輸出、②公害源となる工場・工程の輸出、③資源乱開発による環境の破壊で、「私的節約」だけを追求し、「社会的コスト」と「環境責任」を回避することを許さない「社会経済システム」の設計が、「多国籍企業時代の環境規制」として求められる。

3)「国際分業」を通じた資源と環境の破壊

過剰商業伐採による熱帯雨林の破壊、エビ養殖によるマングローブ林の破壊など、主として天然資源の取り引きに起因する資源と環境の破壊である。一次産品の交易条件の悪化の中で「天然資源の切り売り的過剰収奪」がかつてなく進んでいる。①先進国における国内的構造改革（第一次産業部門切り捨て型の産業構造、資源浪費型の消費構造・生活様式の改革）、②途上国における一次産品の切り売り的輸出依存型経済、モノカルチュア経済からの脱却、③累積債務対策など国際システムの改革が基本にすわらなければならない。

4)貧困と環境の悪循環的進行

「絶対的貧困」が、森林の破壊、砂漠化、水や薪の枯渇、災害の激増をもたらし、そのことによって貧困がさらに深刻化する事態である。その構造的要因の一部として、①かつては食料・繊維・木材などを貧しい人々にも提供し、その最後の支えともなっていた森林・低湿地・河川敷などの「地域共有資源」が、私有化・国有化によって貧しい人々から奪われたこと、②途上国政府が予算の大きな部分を先進国からの武器の購入に当てていることが指摘されている。したがって、地域共有資源を人々の手に取り戻し、地域社会を自律的に再生していくように、国際的な支援をすすめるとともに、軍事支出増大のメカニズムを克服することが重要となる。

5)地球共有資源の汚染と破壊

大気、成層圏、海洋などの汚染と破壊であり「地球温暖化」はその典型である。省エネルギー、代替エネルギーの開発、フロン生産の即時全面廃止、農業と林業の再生などが必要とされる。

著者の以上のような提起に学びつつ、さらに実践的・理論的に発展させるべきテーマとして、三点指摘しておきたい。

1)日本の労働者・国民としての主体的責任の明確化である。これまで地球環境を破壊してきた企業を含めて、「地球にやさしい」を口にしない者はないほどになった。しかし国内での汚染防止装置の技術水準はとにかくとして、著者のあげている公害輸出や途上国の資源・環境破壊、国内農林

水産業の破壊において、また著者がとりあげていない廃棄物からの環境の一大汚染において、日本の大企業・政府は重大な責任を有している。これらの責任をはっきりと追及し、自からの生活様式の転換を自覚的にすすめることこそ、日本の労働者・国民の任務でなければならない。

2)「環境保全型の地球社会」への転換をだれがどのようにすすめるのか、である。①「社会的なコスト」と「環境責任」を組み込んだ「社会経済システム」や、②「第一次産業切り捨て型でない産業構造」、③「資源保全型の消費構造・生活様式」、さらには④途上国の自律的発展とその支援システムを形成する主体と運動過程である。

その点で、公共的な規制や誘導とともに、協同組合運動が重要な役割を果たしうるし、果たさなければならないと筆者は考える。すなわち、①「社会的責任」を自覚的・内発的に引き受け、②農業や林業、さらには社会的サービスや文化（これらも第一次産業とともに、環境・資源を保全するオルタナティブな産業分野である）、リサイクルなど、利潤原理からは冷遇され、歪曲されている社会経済活動を「合意形成」の中で再確立し、③消費・生活様式を自己改革し、④途上国の資源と人を活かした自律的発展をすすめることができるのは、第一に協同組合であるし、またそうでなければならないと思われるからである。

3)環境保全は、あらゆる人間の心身破壊に対する抵抗と克服でなければならない、という点である。本書では、途上国の絶対的貧困と餓死についてふれられているが、エコロジーの最大の危機は、人間の心身破壊であろう。その点で①核兵器の最終的廃絶と原子力発電所の問題、②南北問題を中心とする新しい国際紛争の広がり、③食と医の歪みに発する身体破壊、④「企業社会」の中での「過労死」と心の障害などとの関連についても——欲ばった注文かも知れないが——展開していただきたい。これは、とかく総合的な視野を失いがちな自分自身への自戒でもある。（評者・菅野正純）

（東洋経済新報社 244頁、定価1800円、92年3月刊）

沖浦和光　著

竹の民俗誌

最近、都会ではすっかり見かけなくなってしまった竹藪、そして、経済の高度成長とともに私たちの身の周りから姿を消してしまった竹製品。物干し竿、釣り竿、笊（ザル）、買い物籠、櫛、簾などは今でも使われているものの、全く別の素材によって作られている。どうもこれは使う側の理由ではなく、作る側の意思が強く作用しているように思われる。

ほんの30年前にはリヤカーに竹竿を積んだ、竿竹売りの声が日常的に聞こえて来たし、子供も竹馬遊びをしたり、竹トンボはナイフを使って自分たちで作っていたものであった。従って、「かぐや姫」の話も具体的な竹のイメージの中でとらえることが出来たように思う。今では竹の素材にこだわりをもつものは茶筅や茶杓など茶道の世界、つまりは大人の世界である。

しかし、こんなに物質的に発展した日本の社会にあっても素材としてではない竹の使われ方がある。どんな高層のビルやモダンなビルでもその起工式や解体の時には生竹をたてて注連縄（しめなわ）を張って神座をつくり、神の降臨する聖域（結界）とする習慣があるのがそれである。近代性と古代の奇妙な取り合せ、それが現代日本の現実である。

竹は木であるのか草であるのかよくわからない植物であり、若者は「カオス的な植物である」と言う。他の植物と比べた場合、その特殊性が古代人にとって呪術性をもたせる要因になったのであろう。

竹の原産地は照葉樹林帯であり、竹の文化もネパールからインドネシアまで広く分布しており、それが北上して、南九州に到達したようである。竹にまつわる民話や民俗行事の源流についても深い考察がされており、日本人や日本文化のルーツに感心のある人には興味深い本である。

（評者・外谷富二男）

（岩波新書、234頁、550円、91年9月刊）

武田清子　編
日本文化のかくれた形（かた）

これは10年前に開催された連続講演会の記録である。テーマは「日本文化のアーキタイプスを考える」で、講演者は、加藤周一、木下順二、丸山真男の三氏である。編者によれば、スイスの心理学者カール・G・ユングの用いた「アーキタイプス」という概念をどの様に表現するのか、ということで暫定的に「かくれた形」と表現し、日本文化、思想史が内包する、集団的無意識の領域にかかわる思考様式、価値意識についての考察をする上で一つのキー・ワードとして利用した、とのことである。

三氏の講演はいずれも興味深いものであったが私自身の実践活動とのかかわりという点では加藤周一氏のテーマから多くの示唆を得た。氏は「日本社会・文化の基本的特徴」として五つを取り上げている。(1)、競争的な集団主義、(2)、文化の此岸性、現世主義、(3)、時間の概念としての現在主義、(4)、集団内部の調整装置としての象徴の体系の形式主義と主観主義、(5)、対外的には閉鎖性。

これらの特質は日本の社会に存在するどんな組織にも見られることである。私自身もこうした特質の影響を受けている者との認識をしつつ、この特質のどの部分を活かし、どれを捨象していくのか、ということが今後の課題であると考える。

木下順二氏の「複式夢幻能をめぐって」は別の意味で興味のもてた話であった。芸術におけるリアリズムとは何か、自然主義的写実主義でないリアリティを表現しているものとして、複式夢幻能を取り上げ、自と他、運命というものを一人の役者が演じてしまう構成と、主語が表現される必要のない形式の日本語の持つ特質を考察している。

（評者・外谷富二男）

（岩波同時代ライブラリー、188頁、定価800円、91年10月刊）

各研究会の今後の日程

＝第９回「福祉・医療と協同」研究会＝

・報告：依田発夫（国民医療研究所事務局長）
「在宅ケアの活きるまち―長野小諸の地域医療福祉のあり方―」

・「老後を安心してすごせる地域を、地域なしの医療福祉がありえない」との声に支えられながら国や行政への働きかけをより広く続けていくことは当然として、地域の中で皆が力を出し合い、まちづくりを協同してとりくむ。町や村に新しい主人公たちをいっぱい育てた、この運動を紹介してもらい、地域の医療福祉のあり方と協同の関係を深める報告をしていただきます。
参考文献:『在宅ケアの活きるまち』（自治研）

・５月15日（金）　18：30

・東京芸術劇場、小会議室５（池袋西口公園内、豊島区西池袋１-８-１、池袋駅西口下車、徒歩１分、劇場６階、５階行の大エレベーター利用）

＝第３回「協同組合地域産業基盤」研究会＝

・各地の生協、農協、労金、労済の関係者の方々にご参加いただき地域産業経済の発展の道について意見交流の場としていきます。

・また、宮本憲一他編『地域経済学』（有斐閣）をテキストとして、日本の各地域で取組まれる内発的発展の実践を分析し、理論究明します。今後３～４回ほど継続の予定。参加される方は本をご用意ください。

・５月21日（木）　18：30

・協同総合研究所（ＪＲ高田馬場駅、新宿寄り改札を出て30ｍ）

＝第11回「廃棄物問題」研究会（畔上塾）＝

・テキストの第10章「廃棄物処理計画の研究」を扱います。いよいよテキストも終わりに近くなりました。今回からは各自の考えている事業計画、地域でのとりくみ、構想案等を持ち寄り順次検討していきます。

・５月23日（土）　10：00

・プランド研究所（銀座）

＝第９回「労働組合運動と協同」研究会＝

・報告：村上剛志（日刊工業新聞社、元新聞労連組合員）「企業再建と労働組合」

・1975年当時、日刊工業新聞社の再建に労働組合としてとりくんだ。その経験から、企業経営のあり方、労働者側の経営に対する考え方、またなぜ、労働組合は経営に関与せざるをえなかったか等、その闘争の経緯と理論化の成果を報告していただきます。

・５月28日（木）　18：30

・明治大学神田駿河台校舎、研究棟４階会議室（ＪＲ御茶ノ水駅下車、徒歩５分）

＝第１回「中小企業協同化展望」研究会＝

・報告：角瀬保雄（法政大学）
「中小企業の協同組合化への展望」

・６月13日（土）　10：00～12：00

・明治大学神田駿河台校舎、研究棟４階会議室（ＪＲ御茶ノ水駅下車、徒歩５分）

＝第５回「労働者協同組合法制」研究会＝

・報告：荒木昭夫（児童演劇劇団協議会）
「非営利団体事業の市場経済保護について」

・６月13日（土）　13：00

・協同総合研究所（高田馬場）

＝第４回理事会のお知らせ＝

・第２回会員総会（６月27日、11：00）へむけての議案の討議と検討

・５月16日（土）　11：00～17：00

・明治大学神田駿河台校舎／研究棟４階／第１会議室（ＪＲ御茶ノ水駅下車、徒歩５分、正門入り左奥の白い建物）